

氏 名（国籍）	ほん 洪	ちよん すく 淨 淑（韓 国）
学 位 の 種 類	博	士（心身障害学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 4039 号	
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科	
学 位 論 文 題 目	アメリカ合衆国におけるインクルーシブ教育論の源泉と思想的・社会的文脈に関する研究 － A. ガートナーと D.K. リプスキーを中心に－	
主 査	筑波大学教授	教育学博士 中 村 満紀男
副 査	筑波大学教授	博士（教育学） 安 藤 隆 男
副 査	筑波大学教授	教育学博士 河 内 清 彦
副 査	筑波大学教授	教育学博士 窪 田 眞 二

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）における代表的なフル・インクルージョニストである A. ガートナー（Alan Gartner 1935 – 現在）および D.K. リプスキー（Dorothy K. Lipsky 1939 – 現在）におけるインクルーシブ教育論の論理構造はいかなるものであり、それは何を源泉としているのか、また彼らがインクルージョンの主張をするに至った思想的・社会的文脈はいかなるものであったのかについて究明することを目的としている。

本研究ではインクルーシブ教育論の源泉を次の二つのアプローチから明らかにした。第一に、インクルーシブ教育論が特殊教育以外の他領域から受けた影響を、インクルーシブ教育論の提唱以前にヒューマン・サービス分野に従事していたガートナーに焦点を当て、具体的に実証した。

ガートナーは 1960 年代半ばから 1970 年代まで貧困層が社会の主流に参加することを志向する准専門職運動を主導した。また彼のヒューマン・サービス思想は「消費者」と彼らが担う役割に焦点が当てられ、それは「消費者中心主義」と呼ぶに値するものであった。第二に、特殊教育領域におけるインクルーシブ教育論の源泉は 1960 年代後半特殊教育分野で生じた特殊教育批判の第一の波とそれに続くメインストリーミングの導入過程の解明によって明らかにした。

1980 年代のアメリカでは卓越を追求する教育改革の波が沸き起こる一方、特殊教育界では通常教育主導（Regular Education Initiative: REI）論争が展開された。ガートナーとリプスキーは 1980 年代半ばから急進的な主張をもって REI 論争に参加した。1990 年代における彼らのインクルーシブ教育論は急進的な REI 主張の連続線上にあるものである。すなわち、彼らは 1980 年代半ばからインクルーシブ教育論を構想しはじめ、1990 年代にそれを確立したといえる。

一方、ガートナーとリプスキーをはじめ、M.C. Reynolds, M.C. Wang, M.C. Will, Stainback 夫妻などの REI 論者の主張に保守的特殊教育家が反対した理由は、第一、通常教育側の軽度障害児を受け入れる意志やその能力に対する不信があり、第二、REI がレーガン政府による財政削減政策の一貫であると認識したため

であった。

ガートナーとリプスキーのインクルーシブ教育論から、以下のような 1990 年代前後におけるアメリカの社会的背景の影響が色濃くみられた。

第一、「第一の波」から「第二の波」に移行してきた通常教育改革の動向、第二、協力と多様性の尊重の必要性が一層高まるであろうアメリカ社会における将来の人口統計に対する認識、第三、公民権運動の論理を取り入れた障害者権利運動のインクルーシブ教育に対する主張、第四、特殊教育財政の肥大化に対する批判の声の高まり、がそれである。

ガートナーとリプスキーのインクルーシブ教育論は「特殊教育批判」と「教育改革構想」で構成されている。そしてガートナーのヒューマン・サービス思想のガートナーとリプスキーにおけるインクルーシブ教育論への影響は、特殊教育批判との関連では、彼らが最大の問題とした分離＝不平等の論理、また教育改革構想との関連では消費者中心主義の一貫性に見出すことができる。

一方、特殊教育領域における 1960 年代後半の特殊教育批判の第一の波は、「道徳的・倫理的問題」および「効率問題」と深く関連しており、それは REI やインクルーシブ教育論における特殊教育批判に受け継がれた。しかし公民権運動の論理を取り入れた障害者権利運動の影響によってガートナーとリプスキーはすべての障害児の分離を不平等の問題として認識するようになったのである。

ガートナーとリプスキーのインクルーシブ教育論は保守的な特殊教育家の立場と先鋭に対立するものであった。しかし 1990 年代におけるインクルージョンの実際の進展は、こうしたイデオロギーの対立の和解によるものではなく、特別なニーズのある子どもの増加と限られた財源に悩む教育行政当局が、その解決策としてインクルージョンを導入することによって実現されたものであったのである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、現代教育における最大の国際的なトレンドであるインクルーシブ教育の理論形成において最も大きな影響を与えたフル・インクルージョニストである A. ガートナーとその共同研究者である D.K. リプスキーについて、その教育論の源泉と思想的・社会的文脈に焦点を当てた研究である。

本論文は、これまでしばしば引用されるものの、そのラディカルな思想的源泉が解明されなかった著名なインクルージョニストであるガートナーの背景を 1960 および 70 年代の著作と活動にまで遡り、明らかにした。そのうえで、1980 年代末以降のリプスキーとのインクルーシブ教育における協同的・相補的な理論形成と普及活動について、Regular Education Initiative (REI) からインクルーシブ教育への展開、フル・インクルージョニストへの発展の筋道を明らかにした。

以上の成果は、これまでのインクルーシブ教育論の諸要素に関する理解が表面的であることを明らかにし、彼らのラディカルさの由来をも明示した。本研究は、これまでの日本のアメリカのインクルーシブ教育に関する理解を、少なくともガートナーとリプスキーについて一新した、アメリカでも例をみない優れた研究である。

今後は、リプスキーの思想的・社会的貢献についても考察を深めることが期待される。

よって、著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。